

平成 30 年度 第 5 回川口市美術館建設基本構想・基本計画審議会 会議録

日時 平成 31 年 3 月 14 日（木）10 時 00 分～11 時 30 分

場所 川口市議会第 3 委員会室

出席者（委員） 利根会長 増田副会長 飯田委員 岩崎委員  
後藤委員 鈴木委員 野口委員 原田委員  
丸山委員 森委員 山下委員  
岡村アドバイザー

（事務局） 古澤生涯学習部長 森岡文化推進室長 青木館長  
立花室長補佐 秋田主任 保坂主事

（運営支援） 丹青研究所 大木 外山

議事録

1 開会

2 会長あいさつ

3 議事

議題（1）川口市美術館建設基本構想素案について

【質疑応答】

（会長） 資料 1 について事務局よりご説明があった。事前に皆さんにみていただいたが、本日欠席された委員から意見はでていないか。

（事務局） 欠席された方からは意見は頂戴していない。

（委員） 全体の話として非常に限られた時間の中でよくまとめていただいた。私を含めてそれぞれの委員の方が発言された内容がキーワードとして入っているように思う。

細かい点について確認させていただきたい。3 ページの下の川口市の主な文化資源（人物）というところで、人物名の最後に「ほか」と書いてある。気になったのが、自分の名前が入っていないではないかという方がおられると、市の文書としてどうかと思う。どういう基準で入れたのか、あるいは漏れている方がいないのか、そういう方に失礼にあたるようなことがないのか、確認させていただきたい。

それから、全体的なこととして、18 ページに事業推進スケジュールが書かれているが、計算していくと最短でもこれから 6 年から 7 年かかるのかと思う。これから 10 年先を目指した美術館を考えた時に、もう少し未来志向のキーワードがほしい。事務局はどう

いう作業をすればいいのか困るかもしれないし、他の委員のご意見にもよるが、全体の印象としてお話しした。

(事務局) 文化資源については、第3回審議会の参考資料2 主な文化資源として、文化財や埼玉県が指定するゆかりの偉人、「川口の匠」展で取り上げた芸術家などを掲載した資料を提出した。素案に掲載した人物については、一般的にわりやすい方を掲載させていただいた。詳しい内容は第3回審議会の参考資料2を再度ご確認ください。また、参考資料2については市のホームページで会議資料として掲載している。また本来ならば、文化資源をあらためて調査するのがベストな考え方だと思う。必要に応じて調査を検討していきたい。

(委員) 3ページについては、例えば注釈等で、「『川口の匠』展で展示をした方を中心に掲載した」などと書いておくと、そういう基準で名前が載っているのだとわかる。自分も載せてほしいがそういう基準なら仕方ない、と納得するのではないか。アーティストとして「我こそは」という方もいらっしゃるのでは気になった。追記を提案する。

(事務局) 追記させていただく。

(委員) 素案では「ものづくりのまち」という表現が強く出ていていると感じるが、美術館の必要性の説明で「鋳物や植木」と二言で書いてあり少し寂しい。これを謳うのであれば、「ものづくりまち」として、どういうことをやってきたか、アート&クラフトという接点があるわけだから、表現したほうがよいのではないか。そうすると、先ほどのご発言にあった、人物の名前、人材を掲載することとのつながりも見えてくる。例えば、植木ならこの人だけではないと皆さん感じるところかもしれないので、広がりが出てくるかもしれない。そういう資源の筋があるとよい。

(事務局) 5ページの美術館の必要性のところ、その文章が出ている。そこに一文追加させていただく。また、先ほど文化資源のところ、「川口の匠」の話が出たが、それと合わせて連動するような形で追記したい。

(委員) これを読まれるのは市内の方だけではない。まわりの関係者やこの先広げていく人脈の方に読んでいただく時に、わかっているだけの表現がよいと思う。

(アドバイザー) 9ページの美術館のコンセプトに、「川口の美」を紡ぐ作品とあり、「ものづくりのまち」でいろいろなアーティストがいて、と書かれている。収集して調査・研究する際には、どうしてもアー

ティスト、川口にいる作家に限定してしまいがちで、川口にいる美術コレクターが抜けている。そこが重要な要素であると思うので、何らかの形で追加してほしい。十数年前に、大熊家が横山大観の大コレクションの寄贈を市に申し込んで断られ、埼玉県的美術館に行ったという経緯がある。その経験を踏まえて、鏑木清方の作品の寄贈を市が受けた経緯がある。県立近代美術館に寄贈された時に、川口市にはまだ美術品を持っている人がたくさんいるのではないかと、ある県議会議員の方たちが調査されていたという事実もある。そういう方たちからの寄贈、寄託もふまえたほうがよい。主だった美術館はすべて寄贈からスタートしているし、持っている人から借りて展示している。この間、高崎市美術館で木村忠太の展覧会をやっていたが、なぜ木村忠太なのか調べたら、高崎市内のコレクターから借りて展覧会をやったとのことだった。収集家の寄贈寄託による作品の収集展示も入れておいたほうがよい。

(事務局) 9ページには、「川口的美」を紡ぐ作品をイメージいただけるように整理した。その中の、I-b. 「川口的美」を理解するうえで必要と考えられる作品の下欄に「川口の美術愛好家等が収集した文化度向上に資する作品」と、簡単な言葉で示しているが、今のアドバイザーのご意見と同じ考え方である。今後、収蔵方針等を基本計画において細かく決めていくことになるが、こういったものもイメージしていただければと思う。

(会長) それでよろしいか。

(アドバイザー) 了解した。

(委員) 素案は、大変よくまとめられているが、5ページの美術館の必要性の中に、市民が美術館でリラックスする、憩いの場というか、心安らぐ場所、あまり美術に関係の無い人もそこに行ってみよう、そこで一日楽しく過ごそうと思うような視点をどこかに入れておくとよい。後半には、「市民が集い交流し」という言葉が入っているが、もっと積極的に市民が美術に親しみながらリラックスできる場所をつくるという言葉が、必要性の中にほしいと感じた。「新たな価値をつくり上げる」「特性を活かして」、というのももちろんそのとおりで、「豊かな活力を生み出す拠点」というのもわかるが、一般市民の方の「そんな難しいことはいいから、もっと楽しめる施設をつくってください」という声があるのではないかと思う。格調高くまとまっているが、もう少し市民にとってわかりやすい、親しめる施設をつくることも付け加えていただけるとよい。

- (委員) 今回美術館ができることで一番重要なことは、毎回皆さんからご意見が出ているとおおり、いろいろな市内施設との連携だと思う。それについては、文章のあちこちで連携に触れていることにも表れている。川口には非常に素晴らしい施設、人材が豊富にある。2ページに展示等を行っている市内文化施設の例が挙げられ、参考資料1にもたくさんの市内の文化的な機能、施設が列挙されている。これらとの連携が強化されたら、一般の民間の美術館には、規模はどうあれ、とてもかなわない、素晴らしい美術館になると思う。それは委員の皆さんからご意見が出ているし、企画書にも反映されているが、少し遡及が弱い、表現として弱いと思う。例えば11ページに(2)市内文化施設による機能補完があるが、これが非常に弱い。以前から連携を謳っているので、ここで「お互い補完しながら、新しい美術館が中心となって連携をし、新しい美術館の規模以上の機能を確保できる」ということがアピールできればよいと思う。縦割り行政の中で、なかなか表現をしていくのは難しいかもしれないが、このページのスペースが余っているからというわけではないが、(2)の下に模式図を入れて、新しくできる美術館を中心に、周辺にアトリア、リリア、その他豊富な施設群があって、連携しながら素晴らしい美術館ができることをアピールしていただきたい。文章だけでなく、模式図を入れたら一目でわかりやすのではないかなと思う。ご検討をお願いします。
- (事務局) まず、市民の憩いの場所、心安らぐ場所に関するご質問からお答えする。素案の6ページの「市民ニーズ」に、これまでのアンケート調査を概要としてまとめた。市民アンケートをした時に「気軽に入れる」などの文言がいくつか自由記述にあった。これまでのアンケート調査の結果をふまえて、気軽に市民の方が交流するための施設ということをもう少し遡及できる表現で追記したい。次に、市内施設との連携に関するご指摘については、参考資料1の真ん中の列に、リリアや郷土資料館、旧田中家住宅、メディアセブン等の事業例を掲げた。一番右の列には、想定される美術館との連携事業を列記している。素案の11ページで「機能補完」という言葉で表現しきれていない部分について表記の工夫をしたい。
- (委員) 今のご回答で安心できたが、もう一つ言うと、「補完」と言うと何か足りないものを足すという感じがする。ここでは「補完」というよりもパワーアップという感じが近い。いろいろなテーマや新しい要求にどんどん対応するために、多様な施設・環境を使えるということ表現する言葉がよく、相応しい言葉が見つからないが、より強く、先ほどの委員のご発言のように、未来に飛び出

し、対応していく柔軟性も見えてくるような表現がよい。難しいかもしれないが、ぜひご検討いただければと思う。

(委員) 先ほどの3ページの文化資源(人物)は非常にデリケートで、たとえば物故者に限るのかとか、資格はどういう人なのか、これがなかなか難しい。これを全部公にする場合には、まだこれは未完成であり、例えばであるということを示したほうがよい。「なぜ自分の名前が入っていないのか」などの意見もあると思うので、その辺をソフトに切り抜けられる工夫をしてもらいたい。

(会長) 審議会の当初からそうであるが、今までのご議論は、「ここで作る美術館とは何ぞや」という一番のところで、従来型の美術館でよいのか、そうではなくて未来型で、川口としてどういう美術館をつくっていったらいいのか、そういうご意見があった。それがなかなかまとめきれない中で、事務局案として最大限今までの皆さんのご意見を取り入れた形をつくった。

実は、ここに一部委員の意見を入れて、アドバイザーに「未来型美術施設をめざして」という資料をつくっていただいた。あえて「館」とはしていない。先ほどお二人の委員が発言された考え方も少し入っている。これをアドバイザーにご説明いただき、全体の素案に入れるのか、あるいは別途検討事項という形とするかは別として、美術館とは何ぞやというところから始めたいと、こういう形にまとめていただいた。

(アドバイザー) 11日に素案等資料が送られてきたので、非常に短かい時間の中で、川口市が求める未来型の美術館に関して簡単にまとめさせていただいた。一部の審議会委員のご意見や、今日のご意見にも相当すると思うので、説明させていただく。

まずこの資料の1と2で、先ほどもお話したが、過去に岩田健氏の彫刻や、大熊家の横山大観の大コレクションの寄贈をお断りしたというのもすべて、美術施設、収蔵施設がないとの理由で、受け取っていただければ川口市の貴重な文化資源となったものを断ったという経過がすごく大きかったということを市民の皆さんや審議会の皆さんに認識してもらい、それをスタートとして美術施設の必要性を考えていただければよいと考え、事実としてここに載せている。田原家コレクションや塗師祥一郎氏の作品を収蔵施設は無いけれども、とりあえず保管しておくところはあるからと受け入れたのは、そういう経緯を経ている。

事務局の素案でかなり反映されていて良かったと思う点は、経済

効果を生み出すような、アートとコラボレーションするような、経済、産業、観光に結びつくようなものがなくてはいけないという、川口の独自のものということが記載されていたこと。先ほどのお二人の委員のご意見でも、メディアセブン等市内のいろいろな施設を有効利用し、展示や様々な活動を連携すべきとのことであり、川口市が未来型でつくとしたら、その中心となる、あえて美術館という名前を使わなかったが、例えば展覧会をやる時、こことここで展示し、巡回し、人を動かす、というようなことをまとめてできるような、「アートセンター」的な位置づけの美術施設であるべきと考え、4ページに図示した。周りの施設はもっとたくさんあると思うが、それらをもっと有効利用して、トータルの総括する位置づけでなくてはいけないと考え、図にしたものである。

6ページに表があるが、先ほどの「みんながもっと自然に交流して集えて、気軽にアートを楽しめる場所が必要」とのご意見や、これからは市民が交流して集い、今までのように静かに作品をみて、静かに帰る、というだけでは人が集まらないというのも事実である。みんなが集えて、お茶や食事を楽しめて、たまにはイベントもできて、アートに囲まれた中で会議や集会ができて、というような多様性を持つアートスペースがこれからの美術館の主流になっていくのではないかとこのことを考え合わせて、「C:アートホール～イベント」を、アートセンターという位置づけの中にドンと置いた。そこにはカフェもあり食事もできる。

とは言っても、美術館としては、収集する、保存・研究するというのが核である。今までのように県その他に美術作品が行ってしまったということにならないように、きちんと収集して、きちんと調査・研究するところはやる、それは要なのでつくっておく。今もアトリアには学芸員がいるし、そういうところには学芸員の調査研究者が必要である。

Bの展示は、調査・研究と一緒にしてもよいが、川口ゆかりの作家の作品や、寄託・寄贈された作品をメインにしながら展示をするという場所もつくる。できるならば、産業・経済のより発展のために、ものづくりとアーティストとのコラボレーションによる製品もつくりだして販売していく。

この3つを核に、もっと具体的にして、川口市未来型美術館のビジョンを提示してもいいのではないかと。

5ページの運営体制の部分、調査・研究は学芸部門だが、教育普及も学芸部門に入れて、今まで教育普及をやってきたからアトリアは学芸部門を担ってもらったらどうか。経営企画部門は、ア

トホールのレストランや貸会議室、みんなが集うスペース、ものづくり、会議場やアーティストと連携して新しいものを作り出して売り出していく、ミュージアムグッズというような経済効果を生むところを担っていく。そういう組織がアートセンターの中心にあるというようなイメージでつくっていく。従来型の館長、副館長は、県の美術館でも週に1回しかこない、他の美術館でも美術評論家と学部長などが出前館長みたいに実際は常勤しているわけではなく、予算がなくなると教育長が兼任したりという状況であるが、実際はトータルにアートディレクションをきちんとできる人を置くべきであるし、その直結は今みたいに教育委員会ではないのではないかとイメージである。そういう未来型をもう少し具体的にしていく必要があるのではないかと、たぶん皆さんの意見はこれに近いのではないかと考えている。

(委員) 事務局の素案のコンセプト、文言、哲学は、批判の余地がないほど良くまとまっている。あれだけ何回もやって、コンセプトをまとめた事務局の力はたいしたものだと思う。今のアドバイザーの提供資料もコンセプトはそんなに変わらない。素案にもちりばめられているから良いと思う。

問題は、このコンセプトを実現する美術館ができるかどうかである。運営面など、挑戦して、この企画展はどうだったかなど反省して、また挑戦して、このコンセプトにまた立ち返って進んでいく、そういう美術館の運営ができるかどうか、細目のところにみんなで知恵を出し合って、これができればたいしたものだ。私は畑知事の時代、30年くらい前になるが、芸術劇場をつくる時に、やはりこういう手続きでよいかどうか、神戸の芸術劇場を見学に行った。そういう経験をふまえても、このコンセプトは網羅的で良くできていると思うが、実現できるような運営をどういうふうに保障していくか、そこをしっかりと議論してやっていくことがポイントではないかという気がする。

(委員) 今のご意見に若干寄与するかもしれないが、例えば、県の展覧会の特選など、なかなか北浦和に観に行くといっても大変なので、それを川口に持ってくるのはどうか。それから例えば日展、いわゆる美術館が営業でやっているのと違って、地に足のついた、市と県、市だけだと寄与が足りないので、そういうような抜粋展みたいなものを持ってくる。これはあまりお金もかからないし、運送などの費用も県が市の美術に対して補助をすれば費用がかからないようにして展示する。そうすると、川口でも大勢の人が観

にくるのではないか。もちろん出展している人も観にくることもあるだろう。

もう一つはレベルの高い展覧会、企画展も投げかける。企画はいろいろだが、投げかける。油絵などは非常に丈夫なので、保険は最低限にして、頻繁に会場を貸したり、作品を借りたりするとよいのではないか。それをどういう文言で素案に入れるかというの  
はあり、もしかしたらどこかに当てはまるのかもしれないが、もう少し具体的になると身近に考えられると思う。

(委員)

どちらの資料もとても魅力的に良くまとめられていて感謝する。アドバイザーからのご説明は、非常に柔軟なご発想で刺激になる。以前、市民アンケートの中にあっただと思うが、芸術に関する満足度調査で、京浜東北線沿線の高いが、南北線沿線のは低い。私は南北線のほうだが、医療センターとグリーンセンターはあるが、図書館も芸術的な施設もまったく何もなく、淋しい思いをしている。特に、巡回するという発想は今までになかったもので、それが実現すれば、そういうことも解決すると思いながら、聞かせていただいた。

私は芸術には素人だが、半年間にわか勉強をさせていただき、新聞記事ばかり配ってお恥ずかしいが、その中で「稼ぐ文化」、半年前は私も美術館と聞くと「またハコモノで」と思っていたのが、勉強させていただく中で、意外とお金になるということを知った。グッズがたくさん売れたというご報告もあったが、私も美術館へ行っても、絵を観る時間よりショップにいる時間のほうが長くて、何をしに行ったのからわからないような状態である。うまく仕組みをつくれればお金になるというのは共通理解があるところだと思う。

あともう一点、未来型の一つだと思うが、ダイバーシティ、多様性を考えるうえで、資料の中に障がい者のお話もあったかと思うが、外国籍の人が多いことも議論の中に良く出てきた。もっと外国の文化も許容するような展示を表に出してもよいと思う。人口60万人のうち、かなり多いというお話なので、クリアできればもっと文化が高くなるのではないかと感じた。

(委員)

アドバイザーの提供資料は魅力的でわかりやすいという印象を持った。書いてある内容は確かに言葉で書いたものとグラフィックなものがあり、素案が補完されていくという気がした。一番私が興味を持ったのは、4ページのダイヤグラムだが、もう一つは5ページで、学芸部門と企画経営部門の間に展示・公開が点線で



繋がっているところに興味を持った。これは市民にも参加していただく、ないしは市民の作品を出してみたいと、当然この中でも言われていたし、もう一つは専門家と専門家を目指す若い人たちは完成度の高いものをつくっていくし、先鋭的な、ある意味トゲのあるものをつくるわけだから、それも両方この絵の中の点線部分に含まれているような気がする。それがよく、よその公共美術館だとかちやごちやとなってしまうと、逆に若い人たちが離れていく、世界を目指す人たちが地元の美術館から離れていくという構造がよくある。それに対して、この絵にはそこまで書いてはいないが、そういうことが読み取れ、とてもインパクトのある絵になるのではないかと思った。

それからもう一つ、事務局素案の13ページの3.創造・発信する事業で、「地域経済の活性化」という言葉がはっきり書いてある。これには皆さん賛同されると思う。その前の2.育む事業で「市民が集い交流し、川口の美への興味・関心を高めます」とあるが、関心を高めるというのは弱い表現だと思う。下の方では活性化という言葉を使っているので、「コミュニティを活性化させる」というような積極的な言葉のほうがよいのではないか。一方で、先ほど委員の発言された「だれでも親しめる」という意味の、エネルギーというよりは、美術館へ来て、カフェでのんびり美味しいコーヒーをとというような、美術館の空気を楽しみに来るというのもとても大事である。活性化という言葉とは相反する感じがあるが、両方が重複して交じりあったような空間ができることがとても大事であると、2つの案を見て思った。

(委員) 事務局としてこれをどうまとめるか、各委員から貴重な意見が出て、そのまとめ方について意見を申し上げる。お二人の委員から、11ページの(2)市内文化施設による機能補完のキーワード、ダイアグラムを入れたらどうかというご提案があった。アドバイザーから素敵なダイアグラムを出していただいたが、これから年度末に向かって作業をするのは大変だろうと思い、機能補完というキーワードは弱いのではないかのご意見もあり、電子辞書で良い言葉はないか調べてみた。例えば、英語で「エンパワーメント」というキーワードが閃いて、辞書をみたらあまり良い日本語がない。いずれにしても言葉としては機能補完ではなく、機能向上、機能強化なのかと感じた。事務局にお任せで恐縮だが、補完ではなく、もっとパワーアップさせるんだという感じの表現を検討いただけたらと思う。それから、ページ下にネットワークのようなダイアグラムを入れたらどうかというご提案があったが、私

も同意する。アドバイザーからの提供資料も出てきたので、ここで一体化するのが事務局として大変なのかどうかと思った。これは私の一つの意見だが、事務局は多くの委員から出された修正ポイントを整理して素案は素案でまとめていただき、アドバイザーからの刺激的な資料は、表現のしかたやキーワード、目指すものが少し違うが、内容的には基本的にほとんど同じなので、例えばそれは附則資料、補足資料という形にするのが事務局としてはスムーズにまとめられるのではないかと思うが、いかがか。

もう一つ、組織図について、事務局案は事務局案でということになるが、行政のトップの経験者としてアドバイザーの提供資料の5ページの図について申し上げさせていただくと、例えば産業振興、地域振興、盆栽となると農業振興、あるいは観光、美術館の周辺の市街地整備などまちづくり、景観整備などとなると、多岐にわたってくる。そうすると、私の提案として皆さんの頭の中に入れていただければよいと思うのは、アートセンター長の脇または上に、市長や副市長がいるとよい。例えばセンター長が行政組織の部長級とすると、他の部は「俺は知らないぞ」となってしまう、何も動かせなくなる。市長や副市長の権限で、横串で、アートセンターと美術館の機能が動くようなこともいずれ考えないといけない。これはまだ文章にはしにくい内容だと思うが、審議会委員の方の頭の片隅に入れておいていただけたらよいとご提案をさせていただきます。

私の提案としては素案は素案として上手にまとめていただいて、こちらのアドバイザーの提供資料は附則資料として合わせて出していただけるとよいと思う。

(委員)      アドバイザーの提供資料で、個人のコレクターの受け皿ということがあったが、素案はそのコンセプトが弱い。個人が持っていた美術品を公のものにしていくという発想は、これからの社会で大事な点だと思う。子どももいない、どうするか、といった時に、税金のために処分して持って行くとかしなければならぬ。鑑定番組などを見ていると、結構なものを持っている人がたくさんいる。これからはそういうものを公のものにしていく、というのは大事なコンセプトである。そういう哲学はしっかりこの中に入れてほしい。受け皿がほしい、モノがほしいというのではなくて、公のものにしていくという発想が大事である。よろしく願います。

(委員)      アドバイザーがあえて「美術館」という言葉を使わなかったことに、「ああ、そうか」と膝を打たざるを得ないような気がした。

今まで美術館基本構想・基本計画審議会ということで、「美術館」という言葉に我々審議会委員はとらわれていた。今までの固定観で美術館はこうでなければいけないというイメージがあったが、この審議会を通じて、そうではないということがあらためてわかった次第である。私の感覚では、例えば、川口市立美術館という館名だけではなくて、さらにサブタイトルがつけば、より皆様にもわかりやすくなるのかなと感じた。

- (会長) 一つの意見としては、基本構想自体、議論をした人はこういうものを織り込んでいるというのがわかるが、これだけを読んだ人にはよくわからない。皆さんのほうで、委員提供資料も入れ込んでほしいとなると、なかなか事務局としても素案の中に委員提供資料を盛り込むのは難しいと思う。
- (事務局) できれば、素案としては、いくつかの修正はさせていただき、これで一旦閉じさせていただきたい。この後、約1年をかけて基本計画を審議しなくてはならないが、事業活動についても先ほどの委員のご発言のようにより具体的な内容を組み込んでいかなければならないと思うので、今回のアドバイザーの提供資料は基本計画を策定する上での提供資料として位置づけさせていただき、これまで審議会に出てきた内容と共に、提示させていただく方法をとらせていただきたい。
- (会長) そうすると、基本構想は今日の意見をふまえて一部分修正し、基本計画をつくるにあたっての目指す施設像として審議会としては位置づける。そこに検討事項として出た意見や今回のアドバイザーの提供資料を付けて、素案とするのがよいのではないか。今話したように、素案に提供資料の内容を盛り込むのは難しい。皆さんが必要がないと言うのであれば、入れる必要はないのだが、もし、提供資料の内容を一部でも反映させたいのであれば、そういう形とし、事務局が言ったように、基本計画を検討する際に提供資料の内容を盛り込むこととしてはどうか。
- (委員) とりあえず出ているとよい。
- (委員) 今の会長のまとめた方針で結構だと思う。基本構想の素案をまとめるという作業自体、私も若い時にいろいろな事務局をやっていて、こういうのをたくさんつくってお手伝いしてきたので、これをまた融合させるのは大変だと思う。今日の各委員から出された意見をうまくとっていただいて、これはこれでまとめていただく。会長が上手にまとめていただいたと思うが、これだけではイメージが湧かない部分について、イメージを膨らます、理解の参考に、アドバイザーがせっかくなつくっていただいた資料を補足でつけて

いただくほうが、事務局としては作業がしやすいと思う。提供資料がすべて適切かどうかというのは、アドバイザーには失礼かもしれないが、まだわからない。理解のためには相当役にたったという印象である。先ほど委員のご発言にあったようなイラストも提供資料には全部入っている。素案は素案でまとめていただき、提供資料は素案の理解を促進させるための資料ということで、合わせていただいたほうが作業しやすいと思う。

(委員) 委員のご発言のとおりだと思う。これは雑談めいた話だが、アトリアを建てる時にも審議会をつくり、夜の開催でアドバイザーにも来ていた。残念だったのは、通り一遍の会議で、最終的な結論をつくるための手続きだと、最後に言われたことだ。委員の意見も何も通っていなかった。それに比べ、今回の審議会は非常にまじめで素晴らしい審議会で、ひらたく言えば、委員として自慢できると思う。そういうこと言えば、アドバイザーの提供資料を付けたほうが、見る方も理解できると思う。我田引水かもしれないが、私はそう思っている。

(アドバイザー) 私がなぜ提供資料をつくったかと言うと、私個人のためではなく、委員の皆さんに具体的なイメージをと思ったのと、役所的に素案をつくと限界があり、それをもう少しサポートしなければいけないと思った。なぜサポートしなければいけないかと言うと、先ほど委員のご発言にあったが、美術館という言葉が独り歩きしている。「またリリアみたいなものをつくるのか」というようなイメージが独り歩きしてしまっているという現状に対して、美術館というものを取り除いて、なぜ必要なのかということをもっとわかりやすくオープンに市民に対して語りかけなければと、それで反対なら仕方がないというところと、やはり5年後10年後20年後にあるようなものはこういうイメージであるときちんと示していかないと難しく、理解をしてもらったほうがよいのではないかと思ったからである。できれば、この提供資料は公開していただきたい。というのは、美術館という言葉が独り歩きしないためには、建設に反対する人に対しても、もう少しアートセンター的な、発信する、市民が集う中核となるところをつくろうというイメージを添付してもらったほうが、正々堂々と議論できてよいと思うからである。

(委員) 非常にわかりやすく、前向きなご提案だと思って拝見したが、「アートセンター」と聞いて認識されるものとして、収蔵品を持たない施設を一般的に「アートセンター」と英語で呼ぶ傾向があり、そういう理解が定着しつつある。例えば、国立新美術館は収蔵庫

を持たない展示の施設で、あれを英語で呼称する時にアートセンターと呼んでいる。一方で、アドバイザーのアイデアは非常に的確にまとめられていると思うので、アートセンターという言葉は、現状では一つの施設名称ではなく、一つの機能であるということ、言葉の中で補完された上で公開すれば、後々誤解が少ないと思う。逆に、美術館を管轄する法律は博物館法だが、名称としては美術館で、なぜ博物館ではないのかということも疑問に思われると思う。施設名称はいろいろなところで議論されがちだと思うので、機能の問題としての議論であることが少し前に出ていますよと思う。

(副会長) 皆さんの意見を聞き、私もアドバイザー提供資料の斬新さを非常に高く評価したいと思う。というのは、美術館とはいえ、やはり時代があって、時の流れを意識しないわけにはいかない。私は以前、概念としてソフトの世界とハードの世界という言葉を使ったが、こういうことを極めればそういう方向に行ってしまう。ハードの世界は、形としては、保存とか収集は前もっていろいろなところでできている。それは新しくつくるのではなくて、基本的には変らない。問題はソフトの世界である。私は川口のアートという言葉が非常にあいまい、抽象的だ、こんなことを議論したのではぜんぜん先に進まないと思う。それで、今お話しになったことの斬新さを高く評価したいというのは、素案ということなので、結局はこの2つを両方ミックスしていく方向に努力をしてほしい。それから、以前、委員にアートの概念をご説明いただいたが、アートや芸術、美術館という言葉は非常に使い慣れている。下手をすると既成概念にとらわれやすい。それで、私は川口の美術協会の立場からすると、川口にはアートの既成概念がない。アドバイザーのおっしゃった、未来志向型という言葉は大変魅力ある言葉だと思う。将来に向けて発信する美術館であってほしい。新しいものへの志向の姿勢、態度が大事。だから、素案は過去の言葉にとらわれずに、新しい概念、言葉、感覚、はっきり言うと、センスとアート志向の常識的な点をもう少し見直すほうが、川口市が目指すものを発信する良い機会になると思うし、それはこの時期をおいてないのではないかと思う。経済に左右されたり、地域に左右されたり、事務の作業に左右されたら、こんなことは到底頭に浮かんでこない。実は工芸の世界しか私はとらえられなくて、それほど詳しくはなくてわからないが、ただ工芸の世界では伝統工芸士というのがある。伝統工芸士、伝統工芸作家は、文部科学省が提唱する文化庁の保存とそれを伝承する、教える、残すための仕

組みであり、歴史的遺産をどうするかという一つの走りである。工芸は育ててしまえばその世界は終り。ところが、美術の世界になると、新しいものを目指さないといけない。素案を検討するにあたり、ハードの世界ではなくて、ソフトの世界をより深く大きくとらえてほしい。

(委員) 私は、アドバイザーからの「アートセンター」という言葉は、名称ではなくて概念ではないかと思っている。というのは、前々から何度か申し上げているが、今回美術館をつくることによって、またハコモノができるというご批判が出てくると思われる。そういう意味で、市民の方々に今回の美術館のできる目的、いかに素晴らしいかをお示しする意義の一つとして、各市内施設との連携がある。今度新しく美術館もしくはアートセンターができることによって、周辺の施設と連携しながら、それを模式的に言う一つの丸で囲んで、新しく施設をつくるのではなく、全体がまとまった新しい一つの川口の美術館、どこの市にも負けない、民間にも負けない、素晴らしい設えを持った美術館ができるということアピールできればと申し上げた。まさに、アドバイザーがアートセンターとわざわざ書かれたということは、そういった概念ではないかと思う。その点を強調していただければと思う。

(委員) 今の構造を示しているということで言えば、アートのネットワークだと思う。先ほどの素案の11ページの中の「機能補完」という言葉をあえて言うならば、エンパワーメントもとても良い言葉だと思うが日本語がなかなか無いため、「市内文化施設による可能性の拡大」くらいにしておき、とりあえず目標の輪郭が見えずに可能性がどんどん広がるというイメージでつくっていくとよいと思う。そうすると、先ほどのセンター概念図というのが構造図であるということにつながっていくと思う。

(会長) 素案と1つにするということは、事務局としては難しいか。  
(事務局) これまでいくつか修正をすと言った件については、文言として修正をさせていただく。11ページの模式図については、アドバイザー提供資料を参考に、再度練り直しをする。機能補完についても、文章でもう少し深く伝えられるような表現に直したい。いくつかそれ以外も修正をすと申し上げた点については修正をさせていただく。また、例えば、管理運営のところは、今の段階では素案の中にご提供いただいた内容をすべて含むことは非常に困難であるため、それらもふまえて、本日提供いただいた資料は、「提

供資料」として位置付けさせていただき、基本計画の中で審議が継続的にできるような整え方をさせていただきたい。

(会長) そういう方向でよろしいか。

(一同) 異議なし。

(会長) 今年度は今回が最後だが、修正されたものをもう1回チェックできる時間はあるか。

(事務局) 今年度は時間的に修正も含めて厳しいと考える。審議会では、次年度も引き続き、基本計画策定に向けてご審議いただくが、事業展開や収蔵施設等の具体例として、美術館の視察をまず先にお願ひしたいと考えていた。その間を素案の修正にあてさせていただき、来年度の最初の会議には、その修正したものをご提案できればと思う。

(会長) では、今日の意見も入れた素案と提供資料一式は来年度で出てくるということによいか。素案については、今日の皆さんのご意見を反映して、もう一度4月以降にご提示いただくということによろしいか。

(一同) 異議なし。

## 議題(2) その他

### 【質疑応答】

(事務局) 視察先については、参考事例調査対象の18館から何ヵ所か選定して、バックヤードをなるべく見られるように交渉をさせていただき、委員の皆さんにご視察いただければと考えている。日程と視察先については、後日調整をさせていただく。

次年度の最初の会議は、その視察をした後に、視察の内容をふまえて、計画の資料を提示できるような形をとりたい。

(委員) 視察先について、参考までに申し上げる。伊香保にあるハラ ミュージアム アークという美術館は収蔵庫が素晴らしい。ただ収蔵してあるだけでなく、中にいくつかの作品が展示してあり、収蔵庫を見学しながら、絵を観ることもできるという、なかなか素晴らしい、新しい企画の収蔵庫だと思う。

## 4 閉会